



2009年12月号

高等教育支援センター

発行日 2009年12月12日

## 「学生の主体的学習を引き出すには」

～岡山大学・橋本勝先生を招いて「2009年度全学FD講演会」開催～

10月29日、岡山大学の橋本勝先生（教育開発センターFD部門長）をお招きして「2009年度全学FD講演会」を開催しました。教職員70数名が参加し、「橋本メソッド：いまどきの学生の主体的学習 宿題を課さない時間外学習」をテーマにした橋本先生の授業の組み立て方や工夫、考え方についての話に耳を傾けました。以下、その講演の概要を紹介します。

（講演ビデオは、Kio-Officeの「FDInfo」<FDに役に立つサイト>で観ることができます。）

### もっとも知識定着度が高い「学生同士の学び合い・教え合い」

橋本先生の講演はグループ討議から始まりました。これは、3名程度のグループを作り、与えられたテーマについて自由に討論する橋本メソッドの一つです。このときのテーマはアメリカ国立訓練研究所の「学習7段階論」のピラミッドを表す言葉を考えるというもの。10分間グループ討議をした後発表、受講者の拍手で評価が高い回答を選びました。ちなみに、ピラミッドに表されたものは「教授法別の知識定着度」で、「一方的講義」では10%、「自発的読書」



では15%、「視聴覚教材」では20%、「面前での実演」では30%であるのに対して、「受講生同士の討論」になると50%にアップし、さらに「受講生自身の実験・実習」では75%になり、このピラミッドの中ではもっとも定着度が高い「受講生同士の学び合い・教え合い」になると90%になるということでした。橋本先生は、学生同士の学び合い・教え合いをねらって授業を展開しているようです。

#### CONTENTS

(1・2・3面) 「2009年度全学FD講演会」報告

(3面) 連載：学長談話室「米寿を迎えて思う『思い出・言葉・読書』」

(4面～7面) 「FD・SD研修会」報告

「感じる力をつける!」「シラバスの活用と評価の多様性」「早期の現場体験が必要」

「『切る』ことが親心」「授業に興味を持たせる」「考える学生をつくる」

(7面) 情報センターより「個人データのバックアップいろいろばなし」

(8面) BOOK紹介『ユートピア老人病棟』 / 編集後記

## 選ばれたチームのみが授業で発表、質疑応答の時間を重視

橋本先生の授業は、学生が主体的な学習力を身につけ、学習意欲が自然に向上することを最大のねらいとしています。主な学習目標は「社会人基礎力としてのコミュニケーション力」「主張力、批判力、判断力、行動力など」を学生が身につけることです。

次に、標準的な授業の流れの例を示します。手法としては、学生が自由意思によって3、4名のチーム（小規模クラスでは2名）を編成し、授業で自由に討論をするということが柱になります。まず、学生のチームは各回のテーマから2つ選び、エントリーレジュメ案を提出します。そのうちから各回で優秀な案の2チームが選ばれ、そのチームが調査研究をして授業で発表することになります。さらに発表チームのなかでも学生の支持の多さによって「勝敗」を決めるというゲーム性や競争原理も取り入れられています。また、発表よりも質疑応答を重視していることも授業の特徴の一つです。たとえば、1チームの発表は5～10分であるのに対してそれに対する質疑応答は25分以上かけます。講演後の質問に「質疑応答を活発にするにはどうしたらいいか」というのがありましたが、橋本先生からは「質問が出なかった場合、たとえば『質問がないということはわかっているということだね。では聞いてみよう』というようにやると出てくる」という回答がありました。学生は、授業の最後に毎回シャトルカード（意見・質問用紙）を記入して提出します。

### 個別対応の「シャトルカード」

橋本先生によると、クラスの適正規模は120～150名で、競争原理により自然なレベルアップが図られ、ゲーム感覚の利用により学生がつい乗せられてしまうムードになって主体的学びが引き出され、自由度の大きさによってどんな学生でも自然体で授業に臨めるということです。また、学生が相互に学び合う効果として自己再発見・潜在能力の開発（「自分にはこんな力があつたんだ」）、相互集団教育力（「あの人ができるなら自分だって」）を挙げています。

また、「実は、橋本メソッドの隠れミソはシャトルカード」という話もありました。カードは学生個人が何を書いてもいいというもので、授業に対する質問や感想はもちろんのこと、時事問

### 橋本先生のシラバスの例(一部)

【授業科目】 大学授業改善論

【主題キーワード】 問題の解決、知の創造

【授業の概要】 実際に受講経験のある授業（本学で実際に開講中のもの）を題材とし、大学の授業改善を授業科目毎に具体的に考え、担当教員と直に交渉するという「とんでもない」授業です。大学教育の現状と課題を学習した後、実際の提言内容の是非については受講生全体で検討します。授業方法として橋本メソッドを活用するため、単に説明を聞く授業ではなく、主体的に学習を進める参加型授業です。（橋本メソッドを含めた詳細については初回の講義時に説明します。）

【学習目標】 冷静な分析力を高めるとともに、批判力・提案力を醸成します。また、授業を直視することを通じて、大学における自らの学習計画を見直し、より有意義な学習・研究を意欲的に展開する契機とします。さらに橋本メソッドによる（潜在能力の発揮を含めた）討議・発表能力を高め、バランスのとれた社会的協調性と積極性を身につけます。受講生全体から賛同・共感が得られたチームは担当教員と直に折衝することになりますが、そこでは行動力・社会的交渉力・説得力を育む要素もあります。

【授業計画】

第(-1)講: チーム結成 / 前半エントリーの決定

第0講: プロローグ

第1講: 生徒と学生は何が違うのか 【3】

第2講: 単位の実質化って何? 【2】

第3講: 授業評価アンケートは役立つのか 【10】

第4講: ディプロマポリシー? 何、それ? 【4】

第5講: 全体討論(1) [授業と教科書]

第6講: 対ターゲット科目への意見書検討(1)

第7講: 対ターゲット科目への意見書検討(2)

第8講: 対ターゲット科目への意見書検討(3)

第9講: 対ターゲット科目への意見書検討(4)

第10講: 全体討論(2) [個人対抗] テーマ未定

第11講: 決行報告会(1)

第12講: 決行報告会(2)

第13講: 最終試験

【数】はエントリー予定数...確定

【成績評価】 チームとしての得点が約5割、個人得点が約5割。「決行」まで進むと最終試験は免除されます。（詳細は初回に提示します。）

【コメント】 チームは19できました。前半エントリーの競争率はかなりばらついていますが、意見書作成に限ると全体の約3分の2は「発表」まで行ける計算になります。チームで協力し2種類のエントリーのそれぞれに頑張ってください。

（岡山大学のWebページより）

題やスポーツ、芸能、人生相談、エッセイなど多様な内容があるそうです。橋本先生は毎週どんな内容のものに対しても丁寧なコメントをつけて返却しています。多人数の授業で個別対応をしているわけですが、赤ペンできれいな字で回答している1枚のシャトルカードが示され、「1週間に20～40時間かかる」という説明がありました。

### 個別対応の「シャトルカード」

橋本先生の授業では、特に授業時間外の学習を義務づけてはいません。しかし、学生の授業アンケートでは「予習・復習や宿題・課題・レポートなどに積極的に取り組んだ」の項目が大学全体の平均値を大きく上回っています。強制的な予習ではなく、普段から様々なことに興味を持つことで予備知識を自然に身につけるというねらいが反映されているようです。橋本先生のように「人生全部が予習であり、復習である」と言い切れるかどうか、が私たちに問われているのかもしれない。

最後に橋本先生から次のような4つのメッセージが出されました。

- 1) 授業中の居眠り、遅刻、抜け出しは注意すべきか  
授業の魅力の乏しさの反映ではないのか。私語には厳しく対応しているが、これらのことは自分への授業評価ととらえている。
- 2) 目指すべきは「自分が学生だったら受けたくくなるような授業」
- 3) 学生の潜在的学習意欲を十分引き出せないのは半分以上、教員の責任  
“科目の性格”を理由にするのは思考停止の弁

解であって、必ずやりようはある。

#### 4) 授業はノルマではなく権利

どうすれば楽しめるかを皆で考えたり、試したりするのがFDであり、「FDを楽しむ」という発想を持つ。

#### 感想は「実践している」「参考になる」「資格・免許を目指す本学では難しい」など

参加した教職員アンケートはメールで報告したのを見ていただいていると思います。「わかりやすく参考になった」という意見が多く好評でしたが、特に「すでに実践していた内容だった」という感想や「参考に授業の工夫をしたい」という意見がいくつもあり、本学の授業で改善の工夫が重ねられていることがわかりました。また、国家試験対策や教員採用試験対策などが必要な本学の指導のなかでは学生参加型の授業は導入しにくい、という意見もあり、「畿央大学らしい教育指導」が必要だと感じました。今後のFDイベントについても「教員間で話し合える機会を設ける」「学生参加のイベントがあってもよい」などの提言もあり、来年度計画の際に参考にさせていただきたいと思います。

### <連載：学長談話室>

## 米寿を迎えて思う「思い出・言葉・読書」

冬木智子学長

88年生きてきましたが、思い出は4、5歳くらいのときからあります。それは宝物です。年月がたっても古くならず、むしろなお輝いてきます。まず言葉、そして声、そのときの雰囲気ですね。そういうものは本当に変わらない。

そういう言葉は、自然に降ってくるものでもなく、心から湧き上がってくる愛情ではないか、と思います。自然界で言うと、大地に這った草や木などが水を吸い根を張り、葉を茂らせそして成長して実を实らせる。それが人間で言えば言葉ではないかな、と。それを味わうのが自然界の姿ではないかと思います。

人生を振り返ると、読書、書かれたものを読むことが人間を作る気がします。水や食べ物と同じだと思いませんか。作者が書いたものと対応した疑似体験をさせてもらっている、というのが読書のよさでもあります。読むことによって、たとえばいかにエジプトに行ったように、その地の光景が浮かんでくるし、痛さも暑さも喜びも感じることができる。歴史物などを読むと、昔の人の活躍や人情とかすべて体験できます。書物には、読む者に与えるものがすごく豊富に組み込まれています。

米寿を迎えて、無限の愛情が言葉となり、思い出となって大地から湧き上がってくるように感じるこのごろです。



## 学生の学習について、グループに分かれて討論

前号で「畿央大学の学生を“勉強する学生”にしよう!!」をテーマに実施した「2009年度FD・SD研修会」(9月17日)での問題提起を掲載しましたが、今回は10班に分かれて行ったグループ討論の内容を紹介します。討論や発表の様子も思い出しながら、改めて学生の指導のあり方について考えてみたいと思います。

### グループ討論(1) 「感じる力をつける！」

1991年に始まった大学改革は、20年を経過しても必ずしも学生らのニーズを聞き入れたものではないといわれている。「勉強する」という概念を教育者はどうとらえ、学生はどう認識しているのだろうか。アンケート結果によると自習時間は1時間未満の学生が多いが、学生の生活実態をみると、多くの課題に取り組み、グループワーク、ボランティア、クラブ・サークル活動、アルバイト等充実した学生生活を楽しんでいるように感じる。教職員は、変化する「学生の意識」を的確に捉え、人間として大事な育ちの核心は、「損を

しても危ない目にあっても、このことは必ずやりとげたい」といった自分なりの信念が学生の内面に育つこと、つまり具体的な知識や技術といった「見える能力」より、「見えない能力」の育ちに教育の視点をシフトすることが求められるように思う。また、教えられて学ぶのではなく、空気のように当たり前と考える生活の中に埋もれている人生の宝を発見し、日常生活を深く洞察することにより自ら「気づく・感じる」瞬間、目が啓かれる経験こそが、内面の育ちにつながるのではないかと考え、サブタイトルを「感じる力をつける！」としてグループのまとめをした。

学生が実習での経験や社会活動等で経験したことの学びを資格取得及び授業に対する姿勢の意識向上へと結びつける指導が必要であり、最終的には議論の内容を図のようにまとめた。(B班伊藤)

### グループ討論(2) 「シラバスの活用」と「評価の多様性」

自分自身に自信を持ち、社会に貢献できる人間力を持った学生に成長してほしいということを共通理解とし、C班では「シラバスの活用」と「評価の多様性」を提案した。

キーワードは「にんじん」である。今回研修会のテーマ「楽しく勉強する学生」から、楽しむためには、目の前にぶら下がった「にんじん」が必要なのではないかと考えた。

「にんじん」の一つ目は「シラバスの活用」である。学びの動機付けには、学生の授業に対する必要感の高揚が重要であり、そのための手段の一つとして「シラバスの活用」を挙げた。例えば、現在の「教養科目」「専

門科目」という科目分類だけでなく、「技術の習得」「知識の習得」「理解力の養成」といった科目ごとの目標を明快にする。さらに、他の科目との関係、関連を明示し、学科のカリキュラム全体の中でそれぞれの授業を有機的に捉え、授業内容の系統性を調整しシラバスに反映するなどが考えられる。そのためには、従来のようにシラバスの記述を担当者個人に委ねてしまうのではなく、学部学科ごとの討議が必要であるとともに、作成されたシラバスのチェック機能のシステムも必要であるかもしれない。

「にんじん」の二つ目は「評価の多様性」である。成績は、学生の学びの動機づけに直結すると考えられる。通常、授業担当者である教員個人の判断基準に基づいて成績はつけられているが、もっと多様な評価の在り方が模索できるのではないか。例えば、自己評価や学生相互の評価、他者評価、地域社会からの評価など多様な側面から評価し、評価されることが学生の成

長に結実するのではないかと。さらには、顕彰制度などにより、評価をより具現化することも検討する価値があるのではないかと考えられる。さらに、現在の学生の生活に密着しているといえるアルバイトに関し、対価を得

る仕事をとおした学びとして評価でき、単位認定も考えられるのではないかと意見も出されたが、討議の時間切れとなり次回に持ち越すこととした。

(C 班齋藤)

### グループ討論(3) 「早期の現場体験が必要」

「勉強しない学生」は何が問題であるかについて、特に学生内の要因にフォーカスを当てて議論した。どの学科でも「やる気がない」学生が少なからずいることが報告されたが、親や高校の教員の薦められるままに進学した、他の大学を不合格になったために入学したといった学生がこれらの学生の中に多くいるとの意見が多かった。また、このような学生は自分自身の仕事や進路に生き甲斐を見いだせないでいる場合が多いことは各学科で共通であった。職種や進路によってはこれ

らの発展性が少ないと悲観している学生もいることがわかった。さらに、細かく見ていくと、職業を通して社会に貢献するという意志が少ない、うまく行かないことを環境や他人のせいにするといった傾向が多い、家庭環境に多くの問題を抱えた学生が多い、コミュニケーション能力の低い学生が多いのではないかと意見も多くあった。

これらを改善するためにも、早期からの現場を経験、体験することの重要性がすべての学科から報告された。また、適切な内容、負荷量のアルバイトやボランティアもこれらを改善するのに有効ではないかという意見が多かった。大学としても、学外の協力して頂ける関係施設を充実することが重要である。(D 班庄本)

### グループ討論(4) 「『切る』ことが親心」

「(親)切る」これが我々のグループから出てきたキーワードです。少々過激な言葉ですが、あえて生徒のことを親身になって考えた末の方針です。親切という言葉は親を切ると書きますが、子のために真剣に思えばこそ切らなければならない時もあります。

たとえば授業の中でどの生徒にレベルを合わせて教師は進めていけばよいのか、難しい問題です。こちらを立てればこちらが立たずということになってしまうのですが、あえて少しレベルを上げたところで「切る」ことで学生の質を上げていく努力が必要ではないかという意見が出されました。一方切られた中に、もしかしてダイヤの原石が埋もれている可能性もあるという意見もあり、なかなか一筋縄にはいきません。

そもそも大学とは学びにくところであり、自らの目的意識をもって学ぶ場であるはずだ。そのために大学の学ぶ環境をより自由にできないものだろうか。具体的なアイデアとして出てきたのが「泊まれる大学」(24時間自由に使えるコンピニ大学)である。たとえば人間環境デザイン学科では設計課題の締め切り日が近づ

くと徹夜の連続となり、家に帰る時間すらもつたいないという状態に追いやられてしまう。卒業制作の限られた日しか製図室が終日使えないのである。近隣住民と連携をとりながら、泊まれる大学を実現させたいと切に願っています。

その他さまざまな意見が出されました。細かく説明はできませんが箇条書きにしますと

畿央大学の学生を勉強する学生にするために

勉強をやりたいという気分させる。(生徒が勉強している姿がみえる)

勉強は教室で集中してさせる。

「書く」ことをさせる。

作業が好きな学生が多く、その資質を活かした教育をする。

単位制から学年生にする。(留年制度)

教員を増やす。

等々さまざまな意見が飛び交いました。個性的な先生方とのお話は刺激的で有意義なもので、私自身が勉強になった1日でした。(E 班加藤)

FD・SD研修会での映像は、Kio-Office の「FDinfo」<FDに役に立つサイト>で観ることができます。

## グループ討論(5) 「授業に興味を持たせる」

当グループでは「学生にどのように勉強させるのか」について意見交換した。

まず、現状分析をする中で学生を大きく二つの群に分けた。一つは資格取得など目標を持った学生で、もう一つは目標を持たないあるいは無くした学生である。前者の学生はモチベーションも高く、学習についても時間をどれだけ確保するか量の問題である。それに対して後者の学生は、指導にも工夫が必要で、何をやらせるか質の問題を抱えている。いずれにしても、勉強させるためにはストレートに勉強しなさいというだけでなく、環境作りと自身の意欲を高めるきっかけ作りも大切である。考えられる環境としては、一般教養・一般常識を身につけさせる、基礎学力を身につけさせる、大学生活を楽しませる、そして学習時間の確保の4つである。

まず、一般教養・一般常識を身につけさせるでは、敬語が使えない、社会の情勢に疎い学生が多く、その対応として、「会話とマナー入門」や「日本語と表現」といった科目を受講する意義をもつ

と理解させる、新聞や本を読む習慣を付けさせることが必要である。

二つ目の基礎学力を身につけさせるでは、1回生が特に大切であることから、中・高校時代の復習をさらに厳しくやらせる、基礎教育センターをもっと活用させることが必要である。この時点をクリックすることにより、それ以降の授業がおもしろくなることを認識させる。

三つ目の大学生活を楽しませるためには、授業はもちろんそれ以外のクラブ・サークル活動やイベントへの参加など学校に来る機会を増やし、学校を好きにならせる工夫が必要である。そのためには、学校での学生の存在意義を高めてやることも必要である。

最後の学習時間の確保では、授業評価を厳しくする、アルバイトを自粛させるなどの指導とともに、好きな科目を持たせる、授業に興味を持たせる、学外実習を体験させるなどが提案された。また、心の栄養となる本との出会いが引き金となり、自然と学習時間や意欲が増していったことが報告された。

いずれにしても、学生に勉強させるためには、基礎の段階での落ちこぼれを無くし、授業に興味を持たせることが必要である。

(H班北田)

## グループ討論(6) 「考える学生をつくる」

「勉強とは・・・」「大学生とは・・・」そして、「畿央大学生は・・・」について各学科から長い教育歴をお持ちの先生方と、学習行動の手続きなど普通の学生とかかわることの多い職員の方々からご意見をいただきました。それぞれの経験や現在の状況から、畿央大学の学生の学習について以下のような意見が出されました。

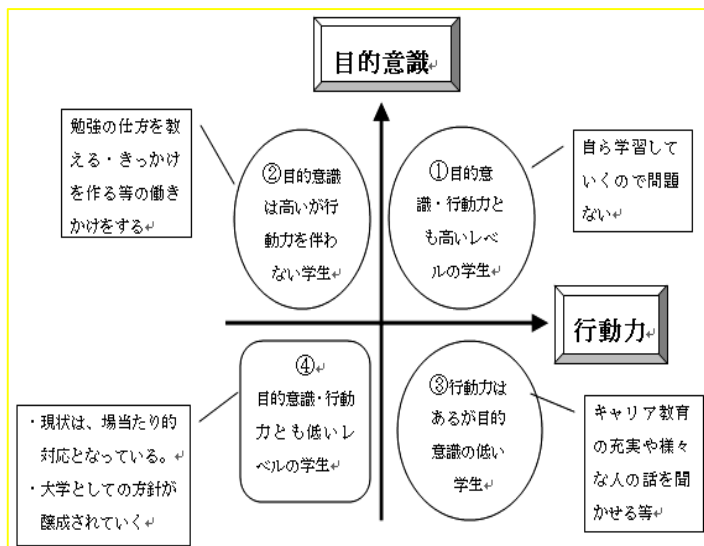
「単に学習時間を増やしたらいいものではない。」  
「過去の学習経験が浅く、勉強の仕方を知らない・勉強すること自体が分からない学生がいて、

何かのきっかけが必要。」「学科や目指す方向によって違うと思うが、何か目標があったら学生は勉強する。」「興味を持って授業を受けることが大切。好奇心の持ちよう。」「勉強する学生というより、どういう学生を作るかを目標にした方が良い。」「学習は時間ではなく質だと考える。」「よいアウトプットが出た時は、結果としてプロセスも良い状況であり、目指すべきアウトカムも獲得されているものである。」「本学学生の、日本の大学の中での位置づけや同系分野の大学の中での位置づけ等、特徴を把握した上で検討する必要がある。」などなど。

これらの意見をまとめると、『彼らに目的意識をどう持たせるか、勉強する学生ではなく考える学生をつくる』ことが重要であることが確認されま

した。畿央大学生を「目的意識の強さ」と「行動力(理解力)」から4象限に当てはめて想定し、その状態別に対応方法を考えてみると以下のような図が出来上がりました。

今年のテーマは、日々直面していることであり、課題そのものが深くて広く、数時間で対策や結論がでるものではないと思いますが、各先生方の工夫やご苦勞を共有できたことで「教職員が一丸となって」という意識が身近に感じる事ができたのは私だけではないと思います。(I班江南)



情報センターより

## 個人データのバックアップいろいろばなし

まず、データはどこに保存できるのかを考えてみましょう。

大きくは次の3種類で、それぞれメリット/デメリットがあります。

(ア) パソコンのディスク(ドライブCとDに分かれる) : 管理はし易いが壊れると修復が困難。

(イ) サーバー : 障害は非常に少ないが各個人に割り当てられている容量が少ない。

(ウ) 外付け記憶媒体 : 取扱いや管理はし易いが、紛失しやすく又データ破壊が起こりうる。

なお(ウ)にはUSBメモリー、外付けハードディスク、CD、DVD等があります。

次に、いろいろなデータはどこに保存されているでしょうか。

- (1) メール(OutLook/Expressの個人用フォルダ) 各個人パソコンのディスク
- (2) メール(メールボックスフォルダ/OWA) メール用サーバー(最大100MBまで)
- (3) マイドキュメント、デスクトップ、お気に入り、ドライブD 個人パソコンのディスク
- (4) 部門ごとの共有フォルダやホームディレクトリ 専用サーバー

そこで、バックアップの重要性!!

パソコン内にあるデータは故障や予期せぬ事態(障害、停電など)で消失する可能性があります。重要なデータは必ずバックアップを取り定期的かつ大きな更新時にも取っておくことが大変重要です。カレンダーに更新予定日を定期的にスケジュールしておくなど工夫して下さい。

バックアップ媒体の提案

- ・重要なデータは外付けハードディスクに定期的に保存する事をお勧めします。
- ・USBメモリーは取扱い易いですが紛失やデータ破壊を起こしやすいので一時的な持ち運び用に限定してください。特に紛失時のデータ漏洩は個人だけに留まらず組織問題や対外問題に発展する可能性もあります。
- ・CD/DVDに記録すると長期間、且つ安全に保存ができます。写真や動画、教材データの保存に適しています。

バックアップを簡単にするファイル管理・保存の方法

データの保存はデスクトップやマイドキュメントやドライブD、さらには外部媒体(USBメモリ等)に分散させず、「マイドキュメント」の下に用途や作業別などに応じて複数のフォルダを作り保管・運

用します。バックアップ時は“マイドキュメント”フォルダだけを選んで一括でコピー＆貼り付けすると簡単にバックアップができます。外付けハードディスクに保存する事をお勧めします。

メールアドレスのバックアップはどうするの？

メールの個人用フォルダデータはパソコンにしか存在しません。このフォルダをバックアップ保管するには、ツールバーの“ファイル”から“インポートとエクスポート”の機能を使います。操作詳細は情報センターにお問い合わせください。

BOOK 紹介 - わたしの一冊 -

## 「ユートピア老人病棟」

江川 晴

2009年 小学館

「ユートピア老人病棟」をわたしの一冊として紹介したいと思った理由はいくつかあります。

一つは8年前、奈良まで看護学生を対象に「私の歩んできた看護」というテーマで講演に来ていただきました。江川晴さんは1924年生まれ。看護師としての経験を生かして作家になったことを力強く話して下さいたことをとても印象に残っています。

次は、畿央大学に勤務するようになったことをご連絡していたところ、大学に小学館を通してこの本を送って来て下さいました。老年看護を担当する者として、感謝の気持ちであつという間に読んでしまいました。

江川晴さんは、慶応義塾大学医学部付属看護婦養成所卒業。慶応大学病院勤務などを経て「小児病棟」で第1回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞優秀賞受賞。その後、「外科東病棟」など多くの著書があります。テレビでドラマ化され中村玉緒さんが看護師長役で登場されていた「いのちの現場」等の原作者といえ、思い出して下さい方もおられるのではないのでしょうか。

この小説は、持ち歩きやすい文庫本です。作品には、個性豊かな患者や看護師たちが登場して読者を引きつけます。認知症といってもごく初期であろうと思われる元眼科医、湯浅マキを中心に物語が描かれています。マキが入院している「さくら病棟」は、療養型病床群が廃止されることになったため、患者たちは動揺してしまいます。しかし、「呆けたって、いいじゃないですか。お互い助けあい、みんなで一緒に生きていきましょう。」というセリフは、助け合って前向きに生きていこうという力強い感動の場面です。現実にはまず存在しない病棟であろうと思います。しかし、「さくら病棟」を「ユートピア病棟」へと変えていく登場人物の生き方を通して、私もポジティブに強く生きていきたい、生きることが素晴らしいと思える本です。

老年看護学を担当していることやこの小説の感想を、江川晴さんに手紙でお知らせしたところです。医療現場のリアリティとユーモアのある作品からは、看護基礎教育のあり方にいろんな教訓と示唆を与えてくれます。

(看護医療学科教授 船瀬孝子)



### 【編集後記】

世間は政権交代のゆくえを注視しています。教育政策も変わるでしょう。私たちは教育に携わる者として、変えてはいけぬもの、社会の要請に応じて柔軟に変えていかなければならないものを見極めながら学生を育てなければなりません。1科目 12、3回で講義をしていた大学がいつのまにか文科省の言う「15回+試験」でやっていたりします。世の中の変化をみつめながら流されない「主体」を確立したいと思うこのごろです。(渡)

授業でゲストティチャーとして1コマお願いした先生の言 - 「いろいろ用意した6割くらいしか話せなかった...」。90分は一般的には長い印象を与えるが、話すには意外と短い。授業内容の焦点化が必要だということを外部の人にも教えていただきました。(昂)